

# おいでん・さんそんSHOW 10月号

2018.10.01発行

特集 | 新しく生まれ変わった「はなもみじ」

## 足助には、町で商売する生き方がある



①「はなもみじ」の新しい借受人となった鳥居健志(とりいけんじ)さん【左】と、丸根敬一(まるねけいいち)さん【右】  
②花のように鮮やかな紅葉を意味する「はなもみじ」  
③15年続けた「かあさんの店」はなもみじの感謝祭。真ん中が、代表を務めた河合澄江(かわいすみえ)さん。



「もう止めたい」。はなもみじ代表の河合澄江さんから、足助支所の地域振興担当に連絡があったのが昨年の7月。合併し



「かあさんの店」はなもみじの開店式典(写真はCHIMONKEN vol.42より)

3者からの応募の中で提案書が採択され、契約者として選ばれたのが、丸根敬一さんと鳥居健志さんでした。

「人通りの多い場所にある建物が空き家になつては、宝の持ち腐れになってしまう」と動いたのが、前述の地域振興担当でした。建物の所管を足助支所に移してもらうように財産管理課に交渉し、昨年12月に新しい貸付人の公募を始めます。

### 貸付人を公募

「人通りの多い場所にある建物が空き家になつては、宝の持ち腐れになってしまう」と動いたのが、前述の地域振興担当でした。建物の所管を足助支所に移してもらうように財産管理課に交渉し、昨年12月に新しい貸付人の公募を始めます。

15年間ありがとう  
今年の3月16日(金)には、それまでの労をねぎらうため「感謝祭」がありました。オープン当時に町長だった故・矢澤長介さんは、「かあさんの店」はなもみじのメンバーに握手を求め、紅葉シーズンだけでなく、年間を通して営業していたこと、町づくりに大変な尽力をしたことを称えていました。

### 店じまいの経緯

「もう止めたい」。はなもみじ代表の河合澄江さんから、足助支所の地域振興担当に連絡があったのが昨年の7月。合併し

## 働き方改革

今年6月に働き方改革関連法が成立した。労働基準法や労働契約法など8つの法律改正で「残業時間の上限規制」、「高度プロフェッショナル制度」、「同一労働同一賃金」などについて来年月から順次施行、適用されていく。労働力人口、長時間労働、少子高齢化などが背景とされるが、先進国(G7)で最下位の労働生産性の向上が最大の狙いであることは容易に想像できる。つまり使用者にとつての「働き方改革」の色彩が濃い。経営者目線で人をいかに働かせるか、労働生産性を高めるかという視点では働き方が良くなるわけがなく、働く人を不幸にしないことを願うばかりである。

文字通りの「働き方改革」は、生活者目線で労働の中に誇りや楽しみ、働きがいを見出すため

美しい紅葉で、世界中から観光客が訪れる足助地区の香風溪。駐車台数が一番多い宮町駐車場から、巴川にかかる待月橋までの道は、香風溪もみじまつりの間たいへんな賑わいを見せます。

対等の立場で、予測不能な社会の変化を敏感に感じ取り、「いま自分は何をなすべきか」を常に考え、目的や結果を自在に変えていく主体性と柔軟性が求められる。そして、そのためには、フルタイムから週3日という働き方、フレックスタイムや在宅勤務など多様な働き方が選択できなければならない。おいでん・さんそんは、働き方改革のトップランナーでもありたいと思う。

センター長のミライのフツに  
向かって!  
センター長 鈴木辰吉

## イベント情報

### とよたいなか暮らし博覧会2018

- 開催期間 | 平成30年11月23日(金)~12月16日(日)
- 申込受付開始 | 平成30年10月22日(月) 公式ウェブサイト<https://toyota-inaka.com/>から申込可能。
- 実施プログラム | ①森と太陽のツリー(旭地区)②朝ドラで大人気!五平餅を作ったべよう!(恵那市明智町)③いなかとまちの文化祭(まちなか)④ツリーハウス完成祝賀会に参加しよう!(旭地区)⑤映画を通して素敵な出会いや語らいの場づくり(旭地区)⑥世界に一つ!自分だけのトンボ玉を作ろう!!(岡崎市額田町)⑦農家民宿ちんちゃん亭de「ちんどんちゃんNight」(旭地区)⑧女子ハンターに聞く山里暮らし(足助地区)など、全26プログラム。\*詳しい日程や、集合場所、参加費などの詳細情報は、公式Webサイトをご覧ください(10月15日(月)に公開開始の予定)。
- 問合せ | おいでん・さんそんセンター-Tel:0565-62-0610



クラウドファンディングサイト「Ready for」でチャレンジ!  
足助の町並み・大正の旧料亭が  
新たな暮らしづくりの場として蘇る

みなさん、クラウドファンディングという仕組みをご存知でしょうか。アイデアやプロジェクトを持つ起案者が、専用のインターネットサイトを通じて、世の中に呼びかけ共感した人から広く資金を集める方法です。



これを利用し、地域人文化研究所・代表理事の天野博之(あまのひろゆき)さんが足助町にある旧旅館・寿々家を再生する資金500万円を集めています。9月27日(木)現在で、76人から1,165,000円の支援がありました。しかし、このプロジェクトは、All or nothing形式のため、10月31日(水)午後11:00までに、500万円以上集まった場合に成立となります。詳細は、ウェブページをご覧ください。

<https://readyfor.jp/projects/asuke-suzuya>

その他の情報は、センターHPをチェック!

REPORT 

# (株)エステム新入社員が「水と科学」テーマの体験学習を実施

つくラッセル(旧築羽小)で、約40名が参加

9月8日(土)、水処理会社(株)エステムの新入社員研修が、旭地区のつくラッセル(旧築羽小学校)で実施されました。4月に入社したばかりの社員23人が、地元の3団体と協力イベントを企画。一般参加者の集客、事前準備から当日のプログラム提供までを2ヶ月間で展開するという研修です。チームワーク、コミュニケーション、企画力、プロジェクト手法を、体で学んで欲しいと、この「現場実践型」の研修を平成28年度から豊田の山村地域で導入しています。おいでん・さんそんセンターは、地元とのつなぎ役を務めました。

豊田市内外から集まった約40名の子どもと保護者を対象に、企業の特徴を活かした『水と科学』をテーマの体験学習を開催しました。

子ども達が社員と体験学習をする様子



「水に触れる」プログラムでは、各自が牛乳パック小舟を作り、水車小屋のある池で浮かべて遊びました。「水を科学する」プログラムでは、矢作川上流・下流・洗剤入りの水、それぞれの成分をCODパックテストという方法で検査しました。洗剤入りの水は明らかに汚れの数値が高く、下流の水は旭の水と同程度の数値で綺麗だったことに参加者は驚きの声をあげていました。そのほか旭地区に住む生き物の観察会や、エステムの仕事を紹介する人形劇もあり、短期間で準備したとは思えない工夫溢れる催しでした。

子ども達にもきっと水環境をより良くしていこうという社員皆さんの熱意が伝わったことと思います(坂部友隆)

REPORT 

# Tongaliプロジェクト実践研修

地域課題の解決策をビジネスプランとして学生が提案

9月10日(月)～12日(水)、名古屋大学はじめ5大学の東海地区産学連携大学コンソーシアム「Tongaliプロジェクト」が主催するアントレプレナーシップグローバルワークショップの公募実践研修が行われ、おいでん・さんそんセンターが全体コーディネートを行いました。地域課題の解決策をビジネスモデルとして提案する起業家精神醸成プログラムに、起業家、イノベーターを目指している大学生、留学生等11名が参加しました。人口減少・高齢化が著しい豊田市山村部で芽生える新しい価値観に基づく様々な潮流についてセンターからレクチャーし、その現場を1～2日目で10か所巡り、3日目にビジネスモデルの提案という密度の濃いスケジュールです。

3日目の報告会では、視察先の事業者など15名もの聴講者の前で発表を行い、間伐材や有害鳥獣を素材にしたユニークなビジネスプランに評価や厳しい意見がありました。学生たちの提案は、性能、デザイン、価格といった従来の商品価値に加え、地球環境や製品の持つ背景、ストーリー性を重視したもので、ブラッシュアップすれば実現可能なビジネスモデルに昇華できると思えました。10月に名古屋大学で予定される本報告会が楽しみです。(鈴木辰吉)



3日目の発表

REPORT 

# 『子育て耕縁会』第2回目開催

「子どもを褒めるとき、叱るとき」を学ぶ

9月12日(水)、次世代育成部会主催の『子育て耕縁会～かよさんのもっと子どもを好きになる～』第2回目が開催され、鈴木佳代さんを講師に迎え、次世代育成部会のメンバーも合わせて19名、子ども達が8名参加しました。

講座の冒頭は、身体を動かすワークで「言葉の力」を感じる体験をしました。前屈をするときに「できない」と「できる」と言いながら屈むのでは、身体の動きがまるで違い、「できる」の方がスムーズです。口から出た言葉には、自分が思っている以上の影響力があるのだと、まずは身体で感じてスタートしました。

今回のテーマは『子どもを褒めるとき、叱るとき』。日常では子どもたちに怒ってしまったり、キツイ言葉かけになってしまい悩んでいるお母さんたちに、佳代さんから、存在と行動は別だということ、子どもはその存在のままでも価値があり、「叱る」とは自分も他人も大切にできるように、一つずつ教えていくことだと話がありました。自分の存在そのものを受け入れてもらう体験こそが、子どもを丸ごと受け入れることにつながるのではないかと考え、耕縁会は、そんな場作りを実践しています。(小黒敦子)



振り返りの様子



鳥居さんは現在でもイベント限定でやきいも屋をやっている



たんころりの夕涼みでの、玉田屋の趣ある出店の様子



昨年のもみじまつりで販売した通称「もみあげまん」は若い女性に大人気だった



今年のゴールデンウィークには、カフェ営業をした



「先人のおかげで現在がある」の想いから写真を飾っている

**2人の出会い**  
丸根さんは、幕末建造の旅籠屋「玉田屋旅館」の主人。鳥居さんは、足助町石橋にある「ろじうらのカフェパンバン堂」の店主。2人の出会いは、10年ほど前にさかのぼります。  
農的な暮らしを目指して移り住んできた鳥居さんでしたが、その生活がしっくりきていないと感じていました。  
そんな時、足助の町並みで夏に行われてる「たんころりの夕涼み」を訪れ、その雰囲気魅了されます。「丸根さんがやっているような、古い町並みを活かした空間演出に自分も関わってみたい」。鳥居さんは、たんころりの準備に顔を出すようになり、丸根さんと親しくなってい

きました。その後、イベントでの駄菓子屋や、やきいも屋の出店経験を経て、5年前にカフェをオープンさせます。  
**人の流れを作りたい**  
2人が不満に思っていたのは、香風溪への観光客の足が、町に向かないこと。「国道420号を挟んで、人の賑わいに雲泥の差がある。当然、売り上げも違ってくる」と鳥居さん。どうにかして人の流れを作りたいと思っていた2人にとって、はなもみじの建物が見えるかもしれないという知らせは朗報でした。  
貸付人の公募に申込み、「香風溪への玄関とも言える場所、香風溪だけでなく町並みの案内をすること、足助の名物を開発していくことなどを提案しまし

た」と丸根さん。2人が選ばれたことについて、「彼らは昨年のもみじまつりの時期に、待月橋の手前の空き店舗を活用し、揚げたもみじまんじゅうや、ドリッパコーヒの販売などをしました。若い世代に人気のある店を、実際に作って見せたのも評価につながりました」と地域振興担当の杉本さんは言います。  
**新しいアイデアを生かした営業**  
4月から賃貸契約が始まり、ゴールデンウィークのカフェ営業、アンティーク着物を子どもに貸し出す「おひなさんぽ」、足助ゴーエンナーレの本部会場など、様々な用途に使ってきました。今年の秋の営業では、提灯屋台を建物の入口と出口に2か所

建てたり、新商品としてもみじ型のはんぺいを提供したりすることを考えています。来年度からは通年営業することを目標にしています。  
**足助で商売をする生き方を見せる**  
新しい「はなもみじ」としてスタートした建物の中には、モノクロの写真が飾られています。聞くと、大正時代に足助の住民がボランティアでもみじを植えた時に飯盛山の頂上で撮影したものだそう。「僕たちは、この人たちがいて、ここで商売をすることができると、もっと盛り上げていく使命があるし、この場所をその拠点にしたい」と丸根さん。ゆくゆくは、観光産業のキーとなるような企業にしていきたい

という想いもあります。「雇用の場にもしていきたいし、自分もここで商売してみたい」という仲間も増えてほしい」と鳥居さん。  
「豊田の田舎といえば、農的暮らしや、森林組合で働くことが真っ先に思い浮かぶと思うんですが、でも、足助には、町で商売をする生き方もあるよ」ということを見せていきたい。ただ単にはなもみじで商売をするだけではない、その先の未来を二人は描いています。(木浦幸加)

11月から  
はなもみじで  
一緒に働く仲間を  
募集しています。  
興味のある方は、  
丸根さんにご連絡ください。  
090-1416-7587 